



2月18日

[夜の底の旅（1）](#)の続きになります～！！

2月18日

「インド夜想曲」でイタリア人作家アントニオ・タブッキは、インドを巡る幻想的な紀行小説を書いた。探している人間がなかなか見つからないインドの旅だ。私はいつかイタリアの小説を書くだろうか。タブッキを訳した須賀は生涯小説を書かなかった。随筆の人だった。しかし「アルガスへの曲がりくねった道」という小説の草稿が遺された。完成したものを読んでみたかった。私は今、旅の日記を書いているのか物語を書いているのか分からなくなる。日記の私は冷淡に彼を無視するが、物語の私は彼に激しくつきつける。あなたが「彼」だってもうとっくに気がついているでしょう？しかし気がつかないふりをし続けてくれるのはありがたい。私達は知らないふりを決めこんで何気無く会話を交している。共犯めいてはいるが、しかしそれは罪深くない。いつも軽々と私はあなたの側へ、あなたは私の側へジャンプできるのは他人同士だからだ。夜のためのスプマンテを買ってきて冷蔵庫に冷やしてある。父からのメールに私の故郷は雪が降っていると書いてあった。遠い地球の裏側を私は思い出して、すぐに忘れる。こちらはこれから長い夜だ。



いいかげん苛立たしいが時差ボケ。空腹なので、レジデンスのテーブルの上に並べてあるキスチョコを一粒食べると胃が落ち着いた。昨日の夕刻、今朝のための牛乳やヨーグルトを買って帰ると庭先で大家さんのおばさんに話しかけられた。何かを尋ねたくていらっしやることは分かるのだが、イタリア語が皆目理解できない。部屋にあがって頂き、手帳を差し出してみた。すると彼女はうっすらと悲しそうに文字は書けないのよ、というようなことを多分仰ったのだと思う。はっと胸を突かれた。結局彼女の言うことはなにひとつ理解できず、それでも大家さんはにこにこしながら出ていかれたのだけれど、私は胸にしんと静かな空洞を見つけてしまった。その国を旅するのに言葉ができなくてもなんとかなるとみんな言うし、私もそう思ってやってきた。でも本当にそうだろうか？お世話になっている大家さんの言葉も理解できずに、さらっと3日間ほど滞在

して、旅をしたつもりで帰ってゆくなんて間違っているのかもしれない。レストランでブオーノ！くらいは言えても本当の意味での会話ができていない事実には愕然とする。必ず、必ずイタリア語を勉強してからまた来ます。いつになく殊勝にそんなことを考える夜明け前。



朝焼けが薔薇色。町中の街灯がふっと消える瞬間を見て何かの魔法かと思う。今は青くなった空を見ながら公園のベンチ。私のお借りしているレジデンスは静かな住宅街なのだが、観光地の集落は昼間は物凄い人ごみになることを昨日知った。だから朝誰もいない道をゆっくり散歩した。日帰り客には味わえないと少し優越感。甘いものが好きではないと公言しているが、こちらで朝ごはんを買いにいくとほとんどがデニッシュ系の甘いパン。しかしこれがおいしい。今朝は林檎とカスタードのデニッシュを選んだが、シナモンがきいていて、しかも熱々でおいしかった。甘いものに目覚めるかも！スキーメーカーのごついダウンジャケットを着てきたおかげで朝の冷気の中でも過ごせる。着てきてよかった。さて今日は何をして過ごそうか。



もう自堕落のきわみにいます。中庭で朝から飲んでいきます。治安のよい街だから気がゆるんでい

やしないかと不安ですが緊張しっぱなしもつらいですね。しかし今もしっかり貴重品は身につけているのでどこか覚醒。

たった今、隣室のカップルと中庭で対面。エスプレッソをご馳走になる。ナポリから新婚旅行できているそう（多分）。ナポリにもうすぐいくと伝えると美しい街だと言われた。うっとりするような瞬間。二人のツーショット写真の撮影を頼まれる。典型的な一眼レフ。新聞社時代を思いだしピントを合わせて撮影。素敵な時間。ああ、また教会の鐘が鳴っている。



まだ飲んでいる。今日はしっかり日焼け止めを塗っているので外も怖くない。教会の鐘が狂ったように鳴っている。日曜日はミサでも行われているのだろうか。日射しが強くなってきている。外で過ごすのも限界かも。痛いように日射しがつきささる。ナポリのカップルが今から帰ると挨拶にきた。私はすでに焼けないようにストールをすっぽりかぶっている。聞こえるのは小鳥のさえずり。平和。なぜ世界に扮装が絶えないのか。こんなに平和なワインのひとつより大切な主義思想を持たない私が情けないのか。一体殺しあう思想とは何なのか？あなたは愛する家族より大切ななにを抱えているのか？人それぞれの事情は私には分からない。少し前までイタリアの隣で起きていた戦争。わたしを離さないで！そう叫んでも戦争に出ていった恋人。どうか私の愛する人たちが平和でいて。

そろそろ日射しが強すぎるのでこのへんで。



一昨日行った店にて昼ごはん。二回目から客の法則は生きていて前回より篤い待遇。パスタの茹で具合から量までことこまかに聞いてもらえた。前回にはなかったことだ。イタリアでは就職試験などではどこの大学をでたかよりも、誰の紹介かが大きなポイントだと何かで読んだが頷ける話である。トマトのスパゲティを前回と同じく頼んだら前はトマトソースだけだったのに今日は果肉がゴロゴロ入っていた！デザートはチョコとエスプレッソ。至福。多分太るなあ。まあ旅で痩せるのも貧相だし思いきり食べるぞ。



カーニバルの貼り紙があったので繰り出すとすごい人。みんな仮装している！飛び散る紙吹雪！お祭りだ！

2月19日



すごい盛り上がってきました。みんな踊っています。陽気だなー。

カーニバルは楽しかった。だが寒空のもと二時間見学していたら頭痛。明日は移動日だし無理はやめようと部屋に帰る。頭痛薬を飲もうとしたらミネラルウォーターがないことに気が付き近所のスーパーにいくと休業だった。仕方なく牛乳で薬を飲んだ。しばらく横になり頭痛がひいたので夕食をとりに。なんとかの一つ覚えでトマトパスタ。もともとパスタはトマトが好きだし日本でもトマトばかり食べるが、この店のものは絶品で中毒のように食べた。日本にこの味の店ができたら行列だろうな。ミネラルウォーターで食べたが、宿に戻ってからの分だと思って2本目を注文し、持って帰ってよいかと聞いて持ち帰った。小雨。カーニバルの紙吹雪がべったり石畳にはりついている。部屋に入ろうとしたら大家さんによびとめられエスプレッソをごちそうになった。相変わらず言葉は通じないが和やかな時間だった。そろそろ眠い。おやすみ。



しとしととやわらかい雨。朝ごはんを食べにバールへ。昨日のカーニバルの紙吹雪を箒で集めている店員さんとチャオ。カプチーノとクリームクロワッサンで1、8ユーロ。財布に細かい硬貨が

たまっているのものでそれで支払おうとレジの前で数える。惜しい。1、7！足りないのもので諦めて大きなお金で払おうとするとバールのお兄さんはそれで構わないというゼスチャーで細かいお金を集めて受け取ってくれた。今日はこの街を去る日だ。迷路みたいな街にも慣れ、どこの通りからも迷わずに帰宅できるようになったと思ったらお別れ。早朝のテレビでは中国を紹介する紀行番組。イタリア人は中国をどんなふうに見るのだろう。イタリア人から見れば私もチャイニーズも区別はつかないだろう。私はアジアの黒髪をなびかせて歩く。外国にいと自分の黒髪がことさらいとおしい。もっとも旅先のため手入れが万全ではなく痛んできたような。雨のアルベロベッコを今日去る。

崩れてゆく視界にあなたがいた。遠いのに懐かしい気分。ほんの少し気持ちが互いに含みあっただけなのに。

確率は苦手。パーミテーションやコンビネーションの数式なんて信じない。

アルベロベッコ駅を出てバーリに引き返す私鉄の中。さっきレセプションでチェックアウトをして駅に向かって歩いていたら、急に車が横付けされた。すわ？と身構えようとレセプションのお姉さん。なんと私は間抜けにも鍵を返し忘れたのだった。ポケットから鍵をとりだし必死に謝る。いざとなると日本語でごめんなさいと言って合掌していた自分はやはり日本人。お姉さんはにこにこ許してくれた。

アーモンドの花が咲いている。まさに花盛り。世界の車窓からを実況中継しているみたい。しかし痩せた土地なのか畑らしきものは見えない。みな何で収入を得ているのだろうか。あ。そういえば朝バールで気が付いたが、地元の男たちはエスプレッソにグラッパを垂らして飲んでいた。今度試してみたいが女の子のやることじゃないのかしら？



バーリで別の私鉄に乗換える。車窓にはオリーブ畑が続いていたが、やがて石ばかりがごろごろと転がる不毛の地といった様相を呈してくる。マテラだ。陸の孤島。サッシと呼ばれる洞窟住居群が広がる。ガイドブックによれば、戦後の農地解放前の貧しい小作農が住んでいたという。

街は死ぬほどおどろおどろしい。どの家にも魔女が住んでる。きっとそうだ！私は怖くて足がすくむ。陰鬱な天候のせいだけではない。街が呪いに満ちている感じ。ドミトリーがあるのでとりあえず様子を見てみようと思門をくぐった。白人が10人くらいたむろしている。ジャパニーズと誰かが口にした。そのあとからかうような英語。明らかに侮蔑の言葉。漏れる失笑。全員に無視される。ああこういうのが人種差別っていうのか。私は悲しくなって門を出た。しばらくいくと比較的新しいホテルがある。聞くと意外に安い。しかも部屋は南国のリゾート並にスタイリッシュ。洞窟を利用した近代的なホテルだ。ここに泊まることにする。しかしどんなにいいホテルに泊まっても気分は沈んでいる。我ながらひどいショック。呪いの街の呪いの人種差別。

とはいえすごく素敵なホテルだ。また3日泊まることにする。部屋にこもって書き続けるかも。ではまた。

2月20日

---



水村美苗「私小説」の中で、マンハッタン暮らしの姉が人種差別にあうエピソードがある。店から追い出されるのだ。姉妹は白人に自分たちがサービスを受ける権利があるのかびくびくすると話しあう。小説の中で人種差別は特権ですらあった。外国暮らしをするという特権に付随する特権だ。しかし実際に嫌な目にあうとそんなカッコいいものじゃないのだと思い知る。ひたすら悲しく惨めだ。

夜ごはんを食べにでた。サッシ群の中にトラットリアをさっき見付けていた。しかし気が乗らなかつた。さっきの連中と出くわすと思うと嫌だった。店はやっていなかった。ほっとしたと思う。少し歩くけれど、駅からの途中にチャイニーズレストランをみかけていた。気がつくところへ向かっていた。特に白い米が恋しかったわけではない。同じ黄色人種なら。私はそう考えていたはずだ。店は中国系の親子が経営していた。気の強そうな奥さんも今日ばかりは懐かしい感じがした。牛肉とピーマンの炒めものと白米を食べた。会計をしてくれた少女の髪は私とそっくりの黒髪のストレートのロングだった。水村美苗の姉も同じ髪型ではなかったか。

ああ考えがまとまらない。今日はとにかく疲れた。シャワーも浴びたし、眠ろう。



落ち込んだまま目が覚めて、なんとか気持ちを切り替えようと熱いシャワーを浴びて髪をしっかりと手入れする。それでも小骨が喉にひっかかっているよう。最悪の朝。しかし朝食を食べにいき突然元気になった。洞窟の地下に案内されるとそこはインテリアの展示場のような洗練された空間。硝子の棚に食べ物や飲み物が並ぶが、日本のどんなセンスのよいインテリア雑誌にも載っていないような美しさ。食器もデザイナーズのスタイリッシュなものを使う。バゲットにオリーブオイルとミニトマトののったトーストやらキッシュやら。見た目も美しい食べ物たち。カプチーノが運ばれてくる。コーヒーの香りで朝を実感。これだけの朝食と、やはりキッチン付きの広い部屋で一泊70ユーロはお得。とりあえず気分がマシになる。食べ物くらいで単純。しかし人種差別について考えるよい機会だから色々書いてみようと思う。写真は朝食会場の洞窟。



外は雨だし、ホテルで過ごす。この街には犬が多い。姿は見掛けないが吠えているのが常に聞こえる。

昨日の出来事がちょっとしたアクシデントだったとは考えられない。(励ましの言葉を書いてくださった方、本当に救われました。元気になったけれど暇なので考えているのです)。何か地球上の拭っても消えないシミを発見した気分なのだった。

これまでの旅では白人もみな優しく接してくれた。あれは観光地でお金を落としてくれる日本

人へのポーズなのか。アルベロベッコでもよほど日本人がくるのだろう。英語より日本語の案内が目だった。

日本人だったたとえば、韓国人を差別する。日本人同士の間でも差別やいじめがおこる。私は自分が精神病を差別されないかとびくびく生きてきたから敏感すぎるのか。いい機会だから頭が痛くなるくらい考えたい。写真は朝食会場の食器。

雨が上がり、旧市街を散歩。この街は死の気配がする。死神すらも忘れ去った、消極的に滅びてゆく緩慢な死。田口ランディの「コンセント」では主人公が死の臭いをかぎとるようになる。パトリック・ジュースキント「香水」の主人公ならこの街の匂いをどう調合するだろうか。

旧市街は観光客の姿も滅多に見ない。まさに迷路の様な街。上がったり下がったり立体的に街は渦巻いている。

パールで昼御飯。ピッツアとビール。

宿へ戻る前にスーパーでミネラルウォーターを買う。500mlでローマでは1ユーロ、アルベロベッコでは0、5ユーロ、この街では0、3ユーロ。田舎なのだと思う。

部屋をノックする音がして出てみると女性がイタリア語でまくしたてる。宿の人間ではない。No！と言うと素直に去った。ドアに硝子のはめこまれているので開けなくても話せる。普段は鎧戸を。中国の高級なホテルで一晩中、売春婦から電話がかかってきたことを思い出すのだった。あれは女たちとホテルが結託していたのだろうか？

さてまた散歩にでかけよう。

2月21日

---

時差ボケというより日本でも朝型の生活でこのくらいの時間には起きているので、リズムがやっと整ってきた感じ。

早朝。耳が痛くなるほど静か。洞窟の部屋を間接照明がやさしく照らす。剥き出しの岩肌も見慣れると味わい深い。

昨夜はまた中華を食べにいった。ほかのレストランが閉まっているのだ。昨日の午後、街を散歩したときも食事できそうな店は見掛けなかった。本当に田舎なのだと思う。昨夜はチャーハンに麻婆豆腐、中華スープを。結構おいしい。今晚も中華の予感。しかし中華街って世界中にあるし、中華料理店もこのイタリアの果てにある。なんだか中国って強靱な感じがする。世界の隅々にまで進出。日本料理だどこまで進出できただろうか？私は和食が大好きだが、分かりにくい料理だと思う。薄味の煮物とかイタリア人が食べるとは思えない。

旅の疲れがでてきている。そんなにハードに動いていないので精神的な疲れ。この疲れをひきずって治安が最悪のナポリに行く気がしない。いったんローマに戻りローマを拠点に動くことを考えている。



今朝はマテーラに着いて初めて晴れた。晴れると幾分かこの街も光を放つ。呪われた街だなんて言ってごめんなさい。朝食前に散歩。昨日までは地図に載っているメインストリートしか歩かなかったが、今日は狭い小径にもどんどん分け入っていく。すると馬などに対面したりして面白かった。途中あわや犬の乱闘になりかけを目撃し、狂犬病！とおののき逃げる。やはり野犬がかなりいるようだ。成田に狂犬病情報が貼ってあったが、撲滅しているのは日本と北欧の少数の国のみなのだ。まあそれだけ野良犬に寛容ではない国ということだと思うけれど。。捨て犬は即、保健所送りなんだよね。猫が大好きだから猫はわりと野良が許されているのは嬉しいけれど。

しかし私は幼いころ犬に追い掛けられ最後行き止まりで噛みつかれた恐怖体験があるから、犬は野放しにすると危ないのかも。白と黒のブチに咬まれたから101匹わんちゃんが苦手。トラウマ。

朝食会場ではビジネスマンの陽気なおじさんに話しかけていただいて楽しいひととき。英語が堪能な方で、私の中学レベルの英語も必死に理解しようとしてくれる。日本語はおろか英語でも人と話したのはひどく久しぶりである。昨夜、中華レストランに日本人に見える男の子がいたので日本語が話したくてうずうず観察していたら中国語を話しだしたので断念したのだ。ローマに帰ったら一番したいのは日本語での会話だー。ローマではマイミクのお嬢さんとお食事もあるので楽しみです。偶然ローマ滞在が重なったのです。初めて会うのがローマって国際的！



さて昨日までお酒を飲む元気もなかった。今日は天気もよいし外で飲むことにする。スーパーへぶらぶら行くと可愛いカンパリソーダの小瓶を見つけ、これをテラスで飲むしかないという気分になり5本入りを買う。やはりレジデンス形式のホテルなので共有スペースで気持ちよく飲む。宿の従業員のお姉さんとイタリア語と英語のちゃんぽんの会話。言葉ができないって本当にもどかしい。絶対にイタリア語を勉強しようと心に誓う。お姉さんさんが何歳か尋ねてきたので、自分の年齢をこたえと、なんと向こうは18歳だった。美しいブロンド、宿の制服の黒い洋服。てっきり同世代だと思っていたからびっくりする。学生さん？と尋ねようとしたがとどまってしまった。今日は平日。学生なら学校のはずなのだ。彼女が去るとき、なんとか「あなたはとてもきれいなね」と伝えた。わたしがいくら着飾っても足元にも及ばない。彼女はグラブのほかにメルシーも連発して、お礼なのかチョコレートをどっさりくれた。

このテラスからは岩山の教会が見える。ごつごつした山の頂上に、嫌にストイックなデザインの十字架。あんな場所にどうやってあんな巨大な十字架を立てたのだろう。

空の高いところを鳥が旋回している。今日は一日晴れますように。

私にもっと文才があったなら。一生このまま旅をして、文章を売って暮らせたらと夢みる。もちろん自分の実力は嫌になるくらい知っていて。

やっとこの街に馴染んできたと思う頃に明日移動の予定。

酔った頭で思う。今のこの淡い思いは叶わなくてもよい気がする。いつか会いましょうという約束は永遠に約束のまま。いつか会うという言葉にときめき続けて、でも一生会わない。そのほうが美しいに決まっている。私は過去の美しくなかった思い出にうんざりとする。いつかあの人が強引に会いにきてくれるまで、待つ。あの人は永遠に来ない。永遠に待ち続ける。来なくても恨みはしない。恨む筋合いではない。私は「彼」が誰なのかすら告げていない。

空がいかにも南の色をしてきた午後。白い雲をゆっくりと運ぶあの気流は永遠という言葉と手をつないでいる。旅はまだ続く。



午後も迷宮の街をさまよう。街をひとめぐりしてスーパーでまたお酒を買う。ボトルでアマレットとトニックウォーター。普段は辛いお酒を好むが、今日は甘いお酒の気分だ。

そんなに豪華な旅ではないが、少々贅沢もできる。ローマの安宿で会った学生達はいかに安く旅を切り詰めるかを自慢にしていたが、もうそんな気力はない。勤め人を10年やった私はほんの少し贅沢が許される年齢だ。あと30年働いたらもっと贅沢な旅をするのだろうか。しかし白状す

ると、10年前の体力と気合いがあればもっと勇敢な旅がしたい。でもそれだけのリスクをおかす勇氣はもはやない。

実はさっきもジャポネジャポネって道でからかわれた。酔って気が大きくなっていたので超スペシャルなあっかんべーをしてやった。イタリア人もヨーロッパ系の中ではイタリア人だと馬鹿にされていると読んだことがある。弱い者の弱い者いじめ。やれやれ。写真は朝食。

2月22日

---

夕刻が近付くにつれ、頭の働きも体の動きも鈍くなっていくのは酔いのせいではなくてやはり時差ボケだと思う。日本では深夜に向かう時差だ。

地球が太陽を背にしている側にいないというのに眠気がくるといのは、根本的に間違った行動の結果ではないのか。深夜に労働する人間はいるのだから。高速のジェット機が体の摂理を無視して運ぶこと。

昨夜はそんなわけでひたすら眠く、中華料理店のオープンまで待ってられなかった。いくらなんでもほかに店があるはずだと街に出る。しかし本当はない。随分歩きまわり、やっと一軒見つけた。喜んで扉を開く。ショーケースを見て間違ったことを悟る。こってりと甘そうなジェラートやチョコレート、ケーキが並ぶのであった。しかしただ一種類だけハムとチーズのパニーニがあってそれを注文。黒人の店のお姉さんはジャポネ？と尋ねてきてとても友好的だった。

なんとかお腹もいっぱいになり、旧市街にあるホテルへ帰る。

夜道は夜気がほどよく冷えて心地よい。空には鋭く削ったような三日月がくっきり。洞窟住居群にはオレンジの燈が灯り古風なその夜景は幻想的という言葉が陳腐に思える迫力。そしてどこからパグ・パイプの音色が。私はこの完璧な夜が怖くなってホテルに逃げ帰ってベッドにもぐった。



駅で電車を待っている。トイレの場所を10代の少女に聞く。トイレから戻ると少女が腕に彫った漢字のタトゥー(写真参照)の意味を教えてほしいと言う。

曳迅ほにやらら？読めない。中国語だろうか？しかし何かかっこよい意味を教えてあげないと悪いような気がして辞書をめくる。結局「速い車」という意味だとか教えてしまった！うー、違

う気がする。しかし彼女は満足して友達に言いふらしに行くのだった。かなりとんがったタイプの女の子だしハードな意味のほうがよいと思ったのだけど喜んでくれたみたいでよかった。あはは。

[続きはこちらからどうぞ～！](#)